

知識人の戦争責任・戦後責任——佐多稲子の場合

源 淳 子

論文要旨

戦争責任・戦後責任の問題に強い関心をもつようになったのは、「慰安婦」問題からである。戦後世代の私たちが女性の人権問題として問うべき重大な課題である。拙論は、同時代にあった知識人女性が自らの戦争責任・戦後責任をどのように果たしたのかを問う。このような設問をアウシュヴィッツへの訪問を機縁として論じたものである。取り上げた知識人女性は佐多稲子である。その経緯は本文にゆずるが、アウシュヴィッツ訪問が拙論を書かせたといっても過言ではない。

戦後六〇年、日本はまた「なし崩しのなかつち」で戦争のできる普通の国になろうとしている。こうした情況のなかにおいて、プロレタリア作家が時代の主観性に飲み込まれ、戦地慰問にまで行ったという事実を問う。なし崩しの体制の怖さである。佐多稲子にはそのような体制の怖さを自覚する一方で、それに抗する力が弱かった。では、現代の私たちはどのようにして時代と向き合うことができるのか。拙論は、そのような問題を提起する。

はじめに

二〇〇三年一月、関西大学人権問題研究室発行の『関西大学人権問題研究室紀要』に「『英霊』と『水子霊』からの解放——自立した『個』を考えるために——」を発表した。そのなかで、「英霊」に関係する「靖国の母」の問題を取り上げ、「戦後になって日本の加害責任と戦争協力を反省した知識人女性を、私は知らない」と記したところ、吉田永宏教授（関西大学）から、「戦後に反省した女性知識人に、佐多稲子がいる」

という指摘を受けた。その後、佐多稲子の小説、佐多稲子に関する論文等を読み、佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」は、作家として自身の戦争協力という「恥」を一九七五年一月から十二月、『文芸』に連載し、後に『時に佇つ』として刊行したなかにおいて表象されていることが理解できた。

文学者の戦争責任が問われ始めたのは、一九五五年以降である。吉本隆明は、『文学者の戦争責任』を著し、「戦争期の日本の詩、文学の問題を論ずる場合に、その挫折が、文学の方法上の欠陥、それと関連して日本の社会構造の欠陥と密接不可分の問題であるという認識が必須の条件なのだ。それと共に、戦争期の体験を、どのように咀嚼して自己の内部の問題としながら（中略）戦後責任をどう踏まえてきたかということが、この問題を論ずる場合に不可欠の条件である」と問題提起した。他方、文学者の戦争責任があらさまに問われた事実があった。敗戦の翌年に結成された「新日本文学会」の発起人の人選である。そのときに戦争責任を問われた一人が佐多稲子であった。後年、吉本隆明が「虚しい決定」と批評した人選だった。その「新日本文学会」の「新日本文学」創刊号には、秋田雨雀、江口渙、蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、徳永直、中野重治、藤森成吉、宮本百合子が名を連ね、「帝国主義戦争に協力せず、これに抵抗した文学者」だと決定した。佐多稲子は戦地慰問という「戦争期の体験」が問題とされた。後に、佐多稲子は「発起人メンバアに加えてもらえなくて、初めて強烈な打撃を受けた」と述懐する。こうした経緯をもって、戦後、戦争協力を「恥」とした佐多稲子の新たな出発が余儀なくされたのである。

そうだとするならば、佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」が、作家としての「恥」を拭うかたちで果たされたという一定の評価は認められる。しかし、それでもなお私には疑問が残る。それは、なぜ戦後三〇年もかかったのかということである。さらに、その内容には同じアジアの人びとに及ぼした日本の加害の認識を読み取ることができない。つまり、「戦後責任」の果たし方に不徹底さを感じるのである。

そのような疑問を抱きながら、その後、佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」を考察するという意欲はしばらく遠退いてしまった。そうした時、「戦争責任・戦後責任」論を研究する者としてどうしても訪ねてみたいと願っていたアウシュヴィッツへ友人と行く機会を得た。

飛躍した表現かも知れないが、拙論が書かれる動機は、アウシュヴィッツでの体験に基づいている。それは、アウシュヴィッツが、そこに訪れた人に呼び覚ます人間（過去のみならず現在から未来をも含む）への力学であった。その力学が呼び覚ました当為として、私は帰国後、しばらく関心の外にあった佐多稲子をもう一度、私のなかに呼び戻すことにした。それは、『時に佇つ』で著している「戦地にいる兵隊と直かに接した経験は、自分の行為の意味を感情で溶かすものだった。敗戦で終って、その直後に、あからさまになったわが行為の泥のおもいに蹠跟となっ

て、しかしそのなかで反芻する思いはやはり情に流れ、それは一層私を苦痛にした^⑤とか「私の、戦後に自分を追及せねばならなかった戦争協力者の責任は、私の思想性の薄弱と、理念としての人間への背信として負わねばならぬものだった。が同時に私は、あの戦争の場所で逢った人たちと自分の関係に負い目を感じていた^⑥」といった作家の「良心」がどこまで戦争責任の言説として他者に通じるのかという関心でもあった。

拙論では、アウシュヴィッツが人類に及ぼした力学に呼び覚まされて、佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」を再考察したものであることから、まず「アウシュヴィッツ」から書き始めることにする。

一 アウシュヴィッツへの旅

無縁から有縁へ

私が、アウシュヴィッツへ行きたいと強く願うようになったのは、「慰安婦」問題にかかわるようになってからである。戦後、日本人にとって無縁の存在とされていた「慰安婦」との出会いは一九九一年、韓国の金学順さんの名乗りからである。その衝撃は、かつてアウシュヴィッツを「読んだ」時の衝撃よりも肉薄して、私に「戦争責任・戦後責任」の意味を突きつけた。それまでも「慰安婦」を記した小説を読み、資料があったにもかかわらず、「わたしの問題」となっていなかった。韓国の年老いた元「慰安婦」のカミングアウトは衝撃的であり、「わたしの問題」として考える強いきっかけとなった。それは日本の戦争を考えることであり、「戦争責任・戦後責任」を問うことだった。

一九四七年、アジア太平洋戦争後に生まれた私にとって、近代日本の戦争は太平洋戦争の始まり（真珠湾攻撃）と広島・長崎の原爆であった。それが高校時代までの近代の歴史教育だった。その後フェミニズムに出会い、女性学を学ぶことによって、「慰安婦」問題が「わたしの問題」に直結した。「性」までが、天皇のものとして、皇軍兵士の慰安のために与えられた。そこに供された女性は「性奴隷」であることを意味し、天皇制を維持するために必要としたもう一つの「性」であった。その残酷さは、戦後も元「慰安婦」の女性たちの存在を非在のものとしてきた。「慰安婦」制度の実態が明らかになるにつれ、ドイツの戦争の実態を知りたいと思った。また、アウシュヴィッツの生還者と「慰安婦」の生還者が私のなかに重なったことも大きな要因になった。「アウシュヴィッツのあとではまだ生きることができるか^⑦」ということばが心を抉った。人間の尊厳を極限まで暴掠することに与した主観性がアウシュヴィッツの生還者、そして元「慰安婦」であった人たちに、死を迫っていた。こ

く平凡な生活者である彼らは、アウシュヴィッツからの生還、「慰安婦」からの解放を喜ぶのではなく、「なぜおまえだけが生き残ったのか」「生きておれるのか」と迫った。生還後、アウシュヴィッツの体験を早く書きたいという衝動に駆られた人もいた。プリモ・レーヴィは帰国して数ヶ月で『アウシュヴィッツは終わらない』を書き上げた。それに対して、元「慰安婦」の女性は四五年も沈黙していた。性暴力は被害者をより強く沈黙させた。

ワルシャワからアウシュヴィッツへ

二〇〇三年八月末、私は、友人二人とともにベルリンからワルシャワへの機上の人となっていた。ワルシャワ空港に到着後、アウシュヴィッツへの街であるクラクフ行きの列車の予約をすまずと、ワルシャワの旧市街地を歩いた。八月の終わりだというのに、肌には伝わる風は冷たい。博物館でワルシャワ壊滅から復興の展示をみた。戦後、壊滅したワルシャワの市街地が、一枚一枚煉瓦を再現し復興していく記録は、過去を現在につなぐ情熱であった。連合軍に爆撃されたドイツ・ベルリンの街でも同じことを感じたが、ヨーロッパの各地にみられるこうした「復興」の姿は、日本の戦後復興や阪神大震災後の街の復興とどこか大きな違いがある。

ワルシャワ駅からクラクフまで二時間三〇分の旅である。車内はコンパクトで、機内食の残りやビールで夕食をすませた。クラクフのホテルに到着したのは二〇時だった。街は真っ暗で何も見ることができなかったが、日本からずいぶん遠くへ来た感じがした。関西空港からパリ経由でベルリンへ、そしてポーランドへという道のりが、そのように思えさせた。

翌朝、八時四〇分クラクフ発アウシュヴィッツ行きのバスに乗る。所要時間およそ二時間。田園風景が続く。美しい街や丘陵地帯を信号もない道路をただひたすら走る。ベルリンからワルシャワに飛んだ飛行機のみで読んだ多木浩二のことばが車窓と重なった。

そこに向かって走りながら自分にはひどく遠い世界へ入り込もうとしているようにも思えた。しかもその遠い世界をまるで自分自身を横切るように経験するのではないかという不安があった。自分にはまったく無縁な存在と思っているものが、自分自身ではないかという懸念が広がる。だがこの他者としての自分を前にした不安こそ、私があえて経験しようとしていたものではないか。いずれにしるこれは容易には答えられない歴史認識の方法への問いのための旅なのだ。⁸

戦後、この道をどれほどの人がアウシュヴィッツに通ったことだろう。日本人も決して少なくないはずだ。そして、その人たちは何を感じて、またこの道を帰っていったのかと思ってみた。アウシュヴィッツに近づくにつれ、緊張している自分を感じた。

アウシュヴィッツ博物館

終点アウシュヴィッツへ着いたのは一〇時半ごろだった。日本人ガイドをお願いする。アウシュヴィッツは現在、「国立オシフィエンチム博物館」として絶滅収容所の歴史を伝えている。博物館の入口はかつての収容所事務所であり、その正面ゲートには、「働けば自由になる」という欺瞞に満ちたことが赤さびたプレートで残っていた。オシフィエンチムとは、かつてポーランド人政治犯を収容する施設であった。アウシュヴィッツという名前に変えたのはナチス・ドイツである。ユダヤ人、ロマなどの収容は、一九三九年九月、ナチス・ドイツがポーランドを占領した後が始まる。

博物館はかつての収容所だった煉瓦の建物群である。そのなかには現在、二八ブロックの展示室及びガス室など多くの施設が残されている。その代表的な建物を案内してもらおう。これまで写真で見ただけが目の前に存在する。髪、靴、櫛、鞆などが集められた展示室を見て回る。そのいずれもが、髪は髪だけが、靴は靴だけが、鞆は鞆だけがすごい量で展示されている。それらがどういう現実を生み出していたかを想像することは難くない。鳥肌が立つのを禁じ得ない。そして、それらが今私たちのために展示されているという思いで地に足が沈む。と同時に、時間と空間の差異が切なく思われる。見るものと見られるものが、ここでは、声を出してともに語れ合えないもどかしさを共有している。

第六ブロックには、収容所に送られ労働に耐えようと選別された男女が、到着後すぐにすべての持ち物を奪われ、からだの毛という毛を剃られ、消毒という名のシャワーを浴びさせられ、囚人服を着せられ、囚人番号をつけられた後に三方向から撮られた多くの写真が展示されている。この写真も何冊かの本に掲載されていて、何度か眼にしていた。死の選別から免れた収容者の顔が廊下の左右に男性と女性に分け掛けられている。死の直前のやせ細った顔ではない。しかし、その表情には、「自然」な人間の精神が喪失した表情が読み取れる。人間としての尊厳が奪われた表情である。

男性の顔と女性の顔を交互に見ながら、廊下を先に進むのであるが、意識せずとも男性と女性の表情を比較することになる。そして、そこに極限の性差を発見する。極限のなかで、人間としてぎりぎりのところまで耐えてきた人たちが、瞬時に尊厳性を奪われ、そして憔悴していく、

絶望に佇む。その顔の表情が、男性と女性で違っていた。それは、男性の変わり方のひどさである。男性の表情は異様に暗かった。否、ここではすべての人が異様な表情としか表象できないが、それでいてなお、男性の顔つきが「自然」な人間からより遠いのである。男女の差に気づいたのは、私だけではなかった。友人も同じことをつぶやいた。

それは、極限においてもあらわれるジェンダーの相だったのではないか。彼や彼女らが絶滅収容所に強制送還されるまでに過ごした生活においては、男性は、女性よりも尊重されてきたはずだ。ユダヤ人の社会は家父長制社会である。そうだとすれば男性の自己喪失感、女性よりもはるかに強かったと想像していいだろう。ショックが大きかったのだ。廊下に展示されている膨大な数の左右の写真は、そのようなことを物語っていた。ジェンダーの違いが、極限の写真から読み取れた。

ビルケナウ

アウシュヴィッツでの博物館を見終わり、バスでビルケナウへ行く。ビルケナウは、アウシュヴィッツ二号と呼ばれ、アウシュヴィッツから約三キロ離れたブジェジンカ村につくられた。一七五ヘクタール（約五三万坪）という広大な敷地には、かつて三〇〇棟以上の収容バラックが建ち並び、記録によると、一九四四年には一〇万人が収容されていた。ガイドの説明によると、この収容所には水がなく、衛生上に欠陥があった。鼠が大量に発生し、囚人の生活環境を悪化させた。ナチスは四棟の農家を焼却炉・ガス室に改造した。そして、死体を焼くための野外焼却場をつくった。正門を入ると赤さびた線路が残されていた。線路は、瓦礫の姿で残る焼却炉・ガス室の近くまで引き込まれている。ヨーロッパ中から輸送された終着地であった。ちなみにアウシュヴィッツは一九四〇年四月の第一号の設置から一九四四年までに三号まで設置され、三号の周辺には四〇ヶ所以上の小さい収容所ができていた。

私たちは、アウシュヴィッツ見学の数日後、ベルリンの出發地であったグルーネヴァルト駅跡地を見学した。一九四二年一月二〇日にヴァンゼー会議が開かれ、ヨーロッパのユダヤ人絶滅計画が決定された。しかし、実際にはその前年である一九四一年一月一八日に、第一回目のユダヤ人移送がグルーネヴァルト駅であり、それ以降三年間にわたって、「もの」となったユダヤ人移送の出發駅となった。プラットホーム跡地には、鉄板一枚一枚に移送の日付、人数、移送先が記入されていた。輸送先はアウシュヴィッツがほとんどである。グルーネヴァルト駅までのなだらかな坂道の近くは住宅街である。当時、この駅に連行されるユダヤ人の集団を近くに住む人たちは見ていたに違いない。送り込まれた人

数が年代とともにプラットホームに貼り付けてある。最初の二年間は一度に千名規模で移送されていた。

駅の記念碑には次のように刻まれている。

一九四一年一〇月から一九四五年二月のあいだにおもにグルーネヴァルト貨物駅からナチ国家によって絶滅収容所に移送され、殺害された五万人を超えるベルリンのユダヤ人たちの想起するために。

生命と人間の尊厳へのあらゆる蔑視に対し、勇気を持ち、ためらうことなく立ち向かうことを私たちに警告するために。

「もの」と化されたユダヤ人にとって、アウシュヴィッツ・ビルケナウへの鉄道輸送は、残酷なものであった。その記憶を書いた人は、必ずその苦しさを記している。レーヴィは次のように書いている。

私たちは寒さと渇きに苦しめられた。停車するたびに、大声で、水をくれ、と叫んだり、せめて雪を一握りだけでも、と頼んだが、ほとんど聞き入れてもらえなかった。(中略)ところが飢えや疲れや寝不足は、さほど苦にならなかった。神経が高ぶっていたので、つらさが減っていたのだ。だが夜には絶え間なく、悪夢に責め立てられた。⁽⁹⁾

また、一五歳でアウシュヴィッツに収容されたエリ・ヴィーゼルも過酷な鉄道移送を記している。

私たちは咽喉の渇きに苦しみました。ついで暑さが耐え難くなってきた。

いっさいの社会的な拘束から解放されたために、若い人たちは公然と本能のいうなりになり、暗闇をいいことにして私たちのただなかで交わるのであった。世界は自分たちばかりという有様で、だれのことにも気にもとめなかったのである。⁽¹⁰⁾

レーヴィは、終着駅「アウシュヴィッツ」に「胸をなでおろした⁽¹¹⁾」と記している。しかし、その安堵は到着後十分もしないうちに略奪される。「収容所に入ったものは、九十六人の男と二十九人の女だけで、残りの五百人を超える人たちは、一人の例外もなく、二日と生きていなかった⁽¹²⁾」からである。

ビルケナウの収容所の建物はほとんど崩壊しているが、それでもいくつかが残っていた。木造の数段に組まれたベッドは押し込めるだけの人

を押し込め、けっして安眠を与えるものではなかった。人間的な精神を失わずことを目的としていた。その極みはトイレである。むき出しの便器が並んでいる。それはただ丸いだけの穴が等間隔で存在するだけである。今は何の臭いもしない穴に坐ろうとして力尽き落ちて死んだという。トイレの穴に胸が締めつけられた。

ビルケナウの建物のなかで、最後にみた写真の展示は、収容所に送られる前の生活を写したものである。一人の写真があり、家族の集合写真があり、友人との写真があり、どれもこれもかけがえのない生活の記録である。どれもこれも幸せそうに写っている。そんな生活を一変させたのが、アウシュヴィッツだった。収容所に到着するまでに死んでしまった人を含めて、ここでの人生は殺される人生だった。

ビルケナウには、ガス室と焼却炉の瓦礫がそのまま自然に還元されるのを待つかのように残っていた。多木浩二の説明に従うと、かつて死者の処理を最大の役割としてつくられたビルケナウのガス室と焼却炉は、もっとも効率的な絶滅方法を備えていた。チクロン・Bを使った大量のガス室での殺人である。そして、死体を消却するクレマトリウム技術が、大きな力を発揮した。ガス室と焼却炉を一体化できるクレマトリウムが、ビルケナウの最大の存立の目的であった。それに寄与したのがトプフ親子会社であり、その主任技師であるブリュッファーが開発した¹³。E・トラヴェルソは、ガス室の死を次のように書いている。

絶滅収容所では、死はそのアウラを失っていた。ここでは、犠牲者は他の人間に殺されたのではなく、殺人機械に飲み込まれていたのがある。ジュフリー・ハートマンが書いたように、彼らにはもはや「人間として死ぬ権利」さえもなかった。ガス室では、死がはじめて匿名かつ「清潔」になった。唯一の血は、断末魔の苦悶のなかで、互いに踏み合い、引っ掻き合う犠牲者の血だった。実際、アウシュヴィッツは、一種の近代のビヒモス、即ち、「混沌の世界の怪物」ではなく、むしろ「恐怖の秩序」と工業化された死の勝利として現れた。一九六二年、フランクフルト裁判の際、アウシュヴィッツの役人の一人が表明したように、あらゆる近代産業の場合と同様、歯車装置は、その一つでもが全体のなかでうまく噛み合わねば、動かなくなる恐れがあったのである。¹⁴

私たちは、案内人と別れ、しばらくその瓦礫の上を行ったり来たりした。消却する煙も臭いも嗅ぎわけることができないうガス室と焼却炉の瓦礫に「時間」が惜しまれた。今の私たちには、一秒でも長くここに身を置くほか、かつてここであったすさまじい現実を、内面化できないように思えた。焦りの入り混じった怒りと、悲しみに支配された。何度も何度も、瓦礫の上を行き来し、自然の風化を待つ瓦礫に触れてみた。

アウシュヴィッツへの「墓参」

ビルケナウのガス室と焼却炉の跡では、ダビデの星の旗を掲げるユダヤ人の何組かのグループと出会った。彼らは瓦礫の傍らにいくつもの花束を供えていた。また、人間の尊厳を奪った写真にも一輪のバラが添えられていた。彼らにとって、ここはホロコーストへの怒りと、肉親を失った悲しみの場であり、人間性を剥奪され殺されていった肉親たちを慰める場であるのだろう。否、あるいはそうではないかもしれない。ワルシャワのユダヤ人墓地を訪ねたツヴェタン・トドロフは、「他の墓では、過去が現在に続いているので、墓地が生活の場であるのに対し、ここでは、墓は思い出の石と化し、死したままである」と書いている。そうだとすれば、ここに供えられた花は、死したままの人たちに何を語りかけるのだろうか。グループの人たちが次々に花を手向けている姿をじっと見ているほかに、私たちには何もできない時間が過ぎていった。

「自然」ならざる死がここには記憶されている。アウシュヴィッツそのものがユダヤ人の身体となっているのだ。その意味からアウシュヴィッツ・ビルケナウへの「墓参」は、殺された人を懐かしむのではなく、その身体の声に耳を傾け、彼らを呼び覚ますことであり、呼び覚まされることなのだ。そして、そのことによって初めて、過去を現在につなぐことができるのだ。うずくまっている人がいた。何かを語りかけているようだ。殺されたその後を知らない死者に、戦後のドイツか、生き残った知人の近況報告か、生還者が書いた読後感か、そして、あるいはその後も止むことのない戦争や紛争のことなのか。

アウシュヴィッツ、ビルケナウの見学を終えたのは、午後三時をまわっていた。だからともなく「もう行こう」といい出し、私たちはこの場を去ることを決めた。いつもなら昼食を抜くことなど考えられないのに、空腹感がまったくなかった。それでも軽い食事をとって、私たちはクラクフに戻った。バスで帰る道すがら、再び多木浩二のことばを思い出していた。

われわれのこのアウシュヴィッツでの経験は自分なりの世界の歴史を、言説によって考察するか、芸術によって表象するかはともかく、自ら内面化し、同時に外在化しなければならない立場にいることを見いだすことであった。私は膨大な荷物を背負いこんだ気がした。¹⁶

ドイツの敗戦とアウシュヴィッツの力学

ドイツの戦後、アウシュヴィッツの悲劇がまだドイツの人々に正確に伝わらない混乱のなかで、ヤスパースはドイツの戦争責任を問うた。ド

イツは、「国民の大部分は生活の苦しさがあまりに甚だしく、あまりに直接的であるために、このような議論（ほとんど全世界がドイツを弾劾していること。ドイツの罪が憤激、恐怖、憎悪、軽蔑で論じられていること）に対して無感覚になっていているらしい。どうしたら仕事とパンと、住宅と光熱とが得られるかということに、心を奪われている。眼界が狭くなった。罪とか、過去とかいうことは、聞きたくない。世界歴史には心を動かされない。とにかく苦しむのは御免だ。困窮を脱したい。生きたい。しかし物を考えるのはいやだ」という状況でもあった。

敗戦の翌年一月から二月、ヤスパースはハイデルベルグ大学でドイツの戦争責任を講義した。『責罪論』である。戦時中、妻がユダヤ籍であるために大学を追放され生命の危険に直面しながらも、ドイツの敗戦によって、生きながらえたヤスパース（夫妻）だが、後年、彼はその苦難の時代を回想して「私はヒットラーから八年の休暇をもらったのだ。この休暇がなければ私の後期の哲学も完成されなかったし、偉大な哲人たちへの知識もえられなかったであろう」と述懐した。そのヤスパースの戦後最初の思索が『責罪論』であった。ヤスパースは次のように講義を始めた。

われわれドイツ人には、われわれの罪という問題をはっきりと洞察し、そこから当然の帰結を引き出すという義務が一人一人に課せられている。それはわれわれの人間としての尊厳によって生ずる義務である。¹⁸

講堂は、学生たちで埋め尽くされたといわれている。そして、有名な四つの罪を提示する。「刑法上の罪」「政治上の罪」「道徳上の罪」「形而上的な罪」である。ヤスパースは客観的に罪を述べるのではない。自らの罪として考察し表明しているのである。そのなかで、ヤスパースは「私の従属する権力の主体でありかつ私の現実生活の拠って立つ秩序の主体であるこの国家の行為によって生ずる結果を負わなければならない」という場合に、その公民たる地位において「政治上の罪を負う。『命令は命令だ。』ということは決して無条件には通用しない。命令された場合でも（危険、脅迫、恐怖の程度如何に応じて酌量すべき事情は容れられるが）、むしろ犯罪はどこまでも犯罪であるのと同様に、いかなる行為もまた道徳的判断にどこまでも服している」という意味で、道徳上の罪を負う。最後に、「他人の殺害を阻止するために命を投げださないう手をつかねていたとすれば、自分に罪があるように感ずるが、この罪は法律的、政治的、道徳的には、適切に理解することができない。このようないことが行なわれたあともまだ私が生きているということが、拭うことのできない罪となつて私の上にかぶさるのである」という意味で、形而上的な罪を負うと論じた。しかし、ヤスパースは、最初の講義においては、アウシュヴィッツの存在について触れていない。『責罪論』の本

文「形而上の問題」の章においても「われわれの友人であり同胞であったユダヤ人が略奪、追放、殺害をこうむったことによって政府の犯罪が公然と表面に出てきたとき、あるいはまた一九三八年、ドイツ全土にわたってユダヤ人の神殿・教会堂が焼け落ちて、われわれの上に拭いがたい汚辱を残したとき」と、その経過とユダヤ人への思いを記述している。しかし、その後におきたアウシュヴィッツの惨劇はまだ知られていなかったようだ。

アウシュヴィッツについてヤスパースが認識したのは戦後である。『責罪論』の「一九六二年のあとがき」は、そのことを明白にしている。「いま初めてナチス・ドイツの罪状が国民全体に明らかとなった。私も犯罪がこれほど計画的で、これほど広範囲に及んだとは知らされていなかった」と記述している。しかし、だからといってヤスパースの「戦争責任」論が色あせることはない。むしろ逆である。ドイツの知識人がすべてヤスパースと同じように「戦争責任」を問いかけたわけではないからだ。とりわけハイデガーの「戦後」はそのことを象徴している²⁵。

アウシュヴィッツの訪問後、ベルリンで聞いたドイツの学生運動の話は心に残った。一九六八年はヨーロッパ・アメリカを中心に学生運動が隆盛を極めた年である。そのとき、ドイツの学生運動は自国の戦争責任を問題にし、自分たちの親世代の責任を問うた。わが子からの追及は逃れえなかったのだ。また、学生の「戦争責任・戦後責任」の問いかけは、同時に知識人に影響を与えずにはおかない。同じことはフランスでも行われていた。それは、私たちの世代である。日本の学生運動は何を求めたのかと自問し、その至らなさを友人とともに痛感した。

アウシュヴィッツの旅から帰国してまもなく、日本政府はイラクへ自衛隊を派遣することを決定した。その後、マスコミが報じる自衛隊の「派兵」と、それを見送る肉親や関係者の姿は、かつて私の両親が経験した出征兵士の壮行と重なった。隊員を見送る人々が手に振る日の丸が寒々と感じられた。戦後六〇年を前にして、再び戦争をする国になることを確信させる光景だった。イラク戦争の戦勝国アメリカのもとに参戦するという戦争のできる「普通の国」への既成化は、『憲法』九条の「改正」を目論む政府の動きを加速させるだろう。そして、自衛隊をイラクに「派兵」した日本の国民である私は、否応なく暴力の加害の側に佇んでいる。では、あるとき、「佐多稲子は、どのように佇んでいたのか。戦後をどう生きたのか」という、アウシュヴィッツを内在化した声が私の脳裏に囁いた。

二 佐多稲子の戦争責任・戦後責任

『時に佇つ』

佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」が作品となっているのは「はじめに」でも記したように『時に佇つ』である。『時に佇つ』は、一九七五（昭和五〇）年一月から二月まで、『文芸』に連載された。「その一」から始まり「その十二」で終わる短編集である。「戦争」の問題をテーマにしているのは「その四」であり、佐多稲子が七一歳の時の執筆である。『時に佇つ』の「その四」は、次の文章で始まる。

その操作にどれほどの意味があるのか、しかしある日ふいに過去が結びついてくれば、私はやはりそれを探らねばならない。ふいに戻ってきた過去は、それなりの推移をもって、その推移のゆえに新たな貌をしている。また、そこに在るのが私だけでもない。それらのことが私を引込む。過ぎた年月というものは、ある情況にとっては、本当に過ぎたのであろうか。

「ある日ふいに過去が結びついてくれば」とは、「昭和十六年の秋、私は、新聞社の組織した戦地慰問に加わって、他の二人の作家とひとりの画家との四人連れて当時の『満州』をまわり、ハイラルまで飛んだ。戦時中の私の行動の最初に当るときである」と述べ懐する「過去」である。それは、正月半ばの日曜日に尋ねてきた白い顎髭の老人によって結びつけられた。その人の来訪が三十数年前の佐多稲子へつないだのである。彼は「戦時中、ハイラルへおいでになったとき、そこでお目にかかりました特務士官を御記憶でしょうか。オロチョン族の変装をしておりました。私は、その父親であります」という八八歳になる老人だった。このときの慰問は、宣昌への慰問の前年九月に朝日新聞社が派遣した小説家慰問部隊の時である。しかし、「変装した特務士官」は「情に流れる記憶のなかに浮かび出る性質のものではなかった」が、「即座によりみかえる印象が強い」過去でもあった。

老人が佐多稲子を訪れた目的は、「終戦直前に死んだ」息子の「憶い出集」を出したので寄稿してもらったためだった。佐多稲子は書くことを約束する。老人が帰った後、老人が置いていった「追憶」と題された「憶い出集」を前に、戦後の三〇年の経過を想うのである。「追憶」は一七年前につくられたものであり、今なお八八歳になっても息子の縁をたぐって「憶い出集」をつくろうとする老人への思いをめぐらせながら、

自身の過去をふり返る。そして、「三十数年前がふいに今日に結びついてくるということが一方にあるのも、私の年齢になって出会うことでもある。過ぎたことは案外近い。(中略)今日は今日として在りつつ、いわば老年は、わが生涯の照り返しにつつまれる。それは回顧ではなくて老年の現在でもある」⁽⁴¹⁾という心境を綴り、一九四二年五月から六月の慰問の地であった宜昌に思いを馳せるのである。「当陽から自動車で四時間の宜昌までの途中も、日本軍占領の過程は生ま生ましく、町も村も廃墟の様相であったが、それらの土地で裸になって電線の修理や大工作業などをする兵隊を見れば、私はそれだけを見て、それ以上にはならなかった。(中略)宜昌の町もがらんどうであった。(中略)住人の気配がまったくないというその空虚さは、ひとりではいつときも立ちどまれそうにないほど深かった。ここに駐屯する日本軍部隊が、川に向かった西洋館のひとつを占領している」⁽⁴²⁾。その宜昌から揚子江を渡り、饅頭山に到着。そこで最初に「英霊がおられますから、御焼香をお願いします」⁽⁴³⁾という場面に出会う。それは後でわかることであるが、その「英霊」は、戦後二九年を経て突然暑中見舞いとして送られてきた手紙の差出人の兄であった。佐多稲子が『時に佇つ』を書く前の年のことである。

白木の箱の前で、「位牌を見つめて私の感情がふるえる。それはここで死んだ人の、ここにおける最初の祭壇なのだ。戦死者の肉親も、あるいはまだこの人の死を知らないでいる。そうもおもい、戦死者と、あとを弔うこの陣地の兵隊の心中もおもって、私はうつむいた」⁽⁴⁴⁾。そして、夜通し寝つけなかった明くる朝、「私たちは朝六時にはここから帰る身分であった。帰れる、ということがこの兵隊との決定的な違いであった。それは私にうしろめたさを感じさせた。(中略)帰ってゆくことを突きつける冷酷さに、私は感情を收拾しかねた」⁽⁴⁵⁾。その朝、慰問の一行は馬にまたがり、何度も後ろをふり返るが、饅頭山が見えなくなったとき、どこからかはるかに呼びかける声があった。「その叫び声を聞いたとたん、もう制止がきかず、ほとばしる声で泣いた。(中略)私は背を立てたまま、洩れる泣声をハンカチで押え、蹄の運びにゆられていた。一行の誰も、一言も発せず、蹄の音だけが一定のリズムでつづいていた」⁽⁴⁶⁾。このようにして、佐多稲子のひとつの戦地慰問が終わるのである。そして、先に引用した饅頭山で出会った兵士について、その後、「私の、戦後に自分を追及せねばならなかった戦争協力の責任は、私の思想性の薄弱と、理念としての人間への背信として負わねばならぬものだった。が同時に私は、あの戦争の場所で逢った人たちと自分の関係に負い目を感じていた。殊に宜昌における経験は、私のこの負い目の真ん中にあった」⁽⁴⁷⁾ということばが続く。

『時に佇つ』に描かれた「戦争責任・戦後責任」である。

戦争責任の所在

佐多稲子の戦争責任を追究した高崎隆治の「佐多稲子と戦争」⁽⁸⁾は、佐多稲子の戦争体験（戦地慰問）を詳細に記録している。ここではまず同書から佐多稲子の行動を年代を追って概観する。

一九四〇年六月から七月

朝鮮総督府鉄道局の招待による朝鮮を訪問する。佐多稲子の最初の行動となる。同伴者は壺井栄である。

一九四一年六月

満州日日新聞社の招待で浜本浩、永井龍男と「満州」を訪問する。

同年九月

朝日新聞社より小説家慰問部隊の一員として大佛次郎、林芙美子、横山隆一等と「満州」各地の戦地を慰問する。

一九四二年三月から四月

文芸講演会として、豊島与志雄、浜本浩等と台湾を一周する。

同年五月から六月

新潮社班として上海、南京、蘇州、杭州、漢口、宜昌の中国各地を戦地慰問する。同伴者は真杉静枝である。

同年一〇月から翌年四月

林芙美子等とシンガポール、スマトラを戦地慰問する。

この年表から佐多稲子が赴いた戦地慰問は、朝鮮を除外すると五回ということになる。この内の一九四二年五月から六月の上海、南京、蘇州、杭州、漢口、宜昌への戦地慰問が『時に佇つ』に描かれた慰問の地である。その詳しい日程や内容については、同じく高崎隆治の「華中最前線の女流作家」を参照する。

同書によると、一九四二年五月初旬、雑誌『日の出』（新潮社発行の月刊誌）の特派員として、佐多稲子と真杉静枝は中国へ戦地慰問に行くことになる。出発の朝、羽田まで行くが箱根からの天候が悪く、その日の出発は延期となる。翌日も悪く、三日目になってようやく福岡へ飛び、

一時間ほどの給油と点検後、上海に向かったとある。

上海では飛行場近くのホテルに泊まり、翌日、二人は報道部の将校によって上海の街を案内される。そして夜遅くの寝台車で上海から南京に向かう。高橋隆治は、「本来なら現地軍の幹部は手数のかかる女性の従軍を喜んでなどいないのだが、国民一般の関心が南方地域にばかり向けられているのを彼らは知っていて、大陸の自分たちが完全に忘れられた存在になっていることに不満だったから、陸軍省の今度の計画はむしろ大歓迎だった。したがって現地軍の幹部は二人の女性作家に可能なかぎりの優遇を怠らなかったのである」と評している。そうした事情であれば、相当の厚遇であったと推測できる。

南京からは漢口に向かう。漢口で二泊してさらに当陽へ向かった。揚子江と漢川の二つの川がみえるデルタ地帯を二時間ほど飛んで当陽に着したとある。すぐに乗用車二台とトラック二台で宜昌へ向け出発した。乗用車には彼女たちと司令部の大尉が同乗し、少尉中尉などがもう一台に乗り、トラックには兵士が乗った。当陽から宜昌までは百キロあり、約四時間かかって宜昌に到着する。その間の様子は、『日の出』に執筆しており、高橋隆治は、その時と戦後の『時に佇つ』との違いを克明に比較する。高橋隆治の批評の要点は、「戦後の文は肝心なところがいまいな表現になり、戦中には軍に協力的でも迎合的でもなかったような記述になっている」という。また、「佐多稲子がおのれに誠実な作家であれば、戦争中の『日の出』に掲載した文章はまったくの嘘で、本当はこうだったというひとことを記すべきだろう。それとも、『日の出』の文章に偽りはなく、逆に『時に佇つ』の方がごまかして、半世紀近くも前の記述をいまに覚えている人間などいないだろうと、たかかくくって書いたのかもしれない」と酷評する。

『日の出』特派記者・窪川稲子の肩書きで『日の出』に書いた「最前線の人々」という文書を読んでもみると、「軍に協力的であり迎合的である」という指摘は否定できない。佐多稲子は次のような文書を書いていたからである。

今度の旅で私たちは、泣いてばかり帰ってきたわけでもない。私たちが元気な顔をしてゐるならば、それだけで内地の人々の、殊に内地の女の人々のしゃんとした暮らしぶりも連想して頂けるだらうかと、そんなことを僭越ながら言葉で言ったりもして、笑いながら手を振って別れてもきた。けれども別れてきたたくさんの将兵の方々の顔を思ひ起し、その御苦勞の一端を内地の人々に傳へようとする時、私はやっぱり泣いてしまふ。私の女々しさが、御苦勞を御苦勞ともせず日夜いろいろなところで、いろいろな戦ひをしてゐられる将兵の方々の勇ま

しさを、少しでも傷つけたりしてはいけなとおそれながら。⁽⁴³⁾

佐多稲子らが慰問した宜昌とは、現在、長江（揚子江）を堰き止める三峡ダムの大工事が進む湖北省宜昌市のことである。「大東亜戦争に於ける主要作戦概説 大東亜戦争開戦経緯2 Ⅱ昭和15年概観Ⅱ」というインターネット上のサイトでは、宜昌への侵攻は、一九四〇（昭和一五）年五月から始まる陸海軍航空部隊の重慶に対する奥地進攻作戦と同時に行われたものであり、その作戦には、歩兵第三四連隊、通称幸三七〇三部隊と呼ばれた部隊などが参戦した。同連隊は、日露戦争で名を馳せた軍神・橋中佐がいた部隊として知られ、敗戦までの八年間を中国大陸で戦い続けた部隊である。佐多稲子が慰問したところには新潟の連隊が占領地を守備していたようだが、こうした部隊を「支那派遣軍」と呼んだ。宜昌を占領するとともに、共産党軍への肅清討伐戦を行っていたという。

戦後、佐多稲子の記憶から宜昌を呼び出したのは、昭和四九年の夏に届いた一通の手紙である。その手紙には、「陳者突然不躰なお便りを書かせて頂いております、私事、戦時中（昭和十七年五月三日）中支に従軍し、宜昌で戦死しました故陸軍中尉本間重信の実弟です……」⁽⁴⁴⁾という手紙から宜昌の記憶が書かれる。後述するところと重なるところもあるが、論の道筋上、関係するところを引用しておく。

もう十数年前になるだろうか。新潟からきた手紙は、饅頭山で逢った兵隊のひとりからのものであった。名前は知らなかったし、どの人ともわかることではなかったが、手紙には詳しく自分のその後と今日を書いていた。ある労働組合の仕事をし、結婚をして子供もあるとのこと。尚、あるとき逢った人の数人の無事も書き添えてあった。その人たちが無事であったということは、私の気持にとって、喜びと安らぎとの二重の感動であった。私の、戦後に自分を追及せねばならなかった戦争協力の責任は、私の思想性の薄弱と、理念としての人間への背信として負わねばならぬものだった。が同時に私は、あの戦争の場所であつた人たちと自分の関係に負い目を感じていた。殊に宜昌における経験は、私のこの負い目の真ん中であつた。その人たちが無事だという。それは、先きに云う二重の安らぎを私に感じさせた。新潟のその人との文通が始まった。彼は行動的であるらしく、組合の代表としてソ連へ行つたことなども知らせてきた。⁽⁴⁵⁾

トドロフがポーランドのユダヤ人墓地に佇み書いたことを再び想起する。トドロフはそこで「墓は思い出の石と化し、死したままであることが分かった」と書いたが、佐多稲子にとって、「宜昌」は、「思い出の石」に留められたままだといえるのではないか。また、先述したインター

ネットでは、「大本営は事態が硬直化する前に事変の解決を図るべく中原会戦、清郷工作、長沙作戦等を実施したが、支那大陸はあまりにも広く解決の決め手にはならなかった」と読める。だとしたら、先の佐多稲子の「負い目を感じていた」というのは、すでに決め手のない戦局であると認識していたが、それでも平然を装い兵隊を慰問していたという「負い目」であったのだろうか。しかし、『時に佇つ』からは、そのように理解することはまずできない。ここには、「思想性の薄弱」とか「人間への背信」ということばへの作家の追究はない。それはまた、「戦争責任・戦後責任」への当為を読み取ることができないということである。

続いて『時に佇つ』を引用する。

こういうつきあいがある新潟の彼との間に続き出した頃である。私はあるテレビに、自分の経てきた道という内容で映されることになった。テレビ局の青年たちは、私の過去を調べ始めた。今日までの私の道程で関りのあった人たちにも、出場を依頼するはずで、その打合せも私とした。あれはどういうきっかけであったろうか、饅頭山で逢った人たちをそのテレビに八人も呼ぶことになったのである。局としてはその関りの珍らしさをでもねらうらしい。私はこの機会にその人たちと再会できることで承知した。この話の準備に打ち合せに来た局長が、ふと私にたずねた。

「戦地へ行かれたことを、当時、悪いことをする、とお考えでしたか」

「悪いこと？ いいえ、そうはおもいませんでした」

と私は彼を見上げて答えた。

「あ、そうですか」

と彼はにこりともせず「それならよろしいのです」と、切り口上に聞える答えをした。

そう聞いたとき私は、心の中で、なにおっ、と叫んでいた。表面どうい顔になったか、とにかく私は言葉では何も云いはしない。あとで考えれば、相手はどういう意味である質問をしたのか、なにおっ、と叫んだ私の受取り方が、主観的な誤解であったのか、それはあいまいになった。私のあのときの猛々しい反撥は、それならよろしいのです、などと簡単に審判を下すような、その扱いに対するものだった。私にとっては、そんな軽いものではなかったからである。⁽⁴⁶⁾

『時に佇つ』の戦地慰問は、テレビへの出演の話で終わる。その時、テレビ局の青年への佐多稲子の対応は、誤解を恐れずにいえば、傲慢としかいいようがない。先に私は、「ドイツの学生運動は自国の戦争を問題にし、自分たちの親世代の責任を問うた」と書いたが、佐多稲子には、そうした問いかけに対して応えるべき親世代の責任が主体化されていない。それはまた「戦争期の体験を、どのように咀嚼して自己の内部の問題」とするかと問う吉本隆明の文学者の責任への応答の基本が欠落したままだといえる。文学者として平和や戦争を語る姿勢が平常心として存在していないということにならないだろうか。

慰問を終えた佐多稲子たちは、宜昌から当陽へ、当陽から漢口へ、漢口から南京へと引き返す。南京からの次の目的地は杭州である。杭州の見学の目的は、陥落直前の敵の拠点を観察することだった。また、機上から東陽の街を観察する。東陽の街は燃えさかっていた。それは無防備の都市が炎上している姿だったという。

それから三週間後、佐多稲子たちは上海に戻った。総司令部や報道部が主催したり後援するスケジュールで一杯であったが、上海の街の様子に浮き浮きしていたという。日本軍が支配した地域は、通貨の切り替えて混乱していた。中国人が通貨交換に並ぶ姿に、新しい時代を予感したからだという。また、中国の俳優たちとの会食や中国劇の鑑賞等の休日を楽しんで、彼女たちが帰国したのは、六月初めだった。

このときの戦地慰問の旅から『時に佇つ』が書かれた。前述の高橋隆治は、細かい記述の違いを比較しながら、「佐多稲子のいうことはいったいどっちが本当なのかということになってしまっただが」と酷評する。しかしあえていえば、高橋隆治の批評は、文学的な批評ではない。なぜなら『時に佇つ』が「事実」を記録したノンフィクションではないからである。だとすれば、佐多稲子の表現のあいまいさは、ごまかしとはいえない。文学としての評価はともかくとしても、『時に佇つ』は、確かに文学作品であって、「戦争」の記録ではないからである。

小林裕子は、『時に佇つ』の「解説」で、「口に出して言わないことが、かえってその人間の心情や、おかれた状況の何かを鮮やかに物語る、そんなことが人生においてはしばしばある。『時に佇つ』という小説は、このような場合の沈黙の持つ濃密な層の厚さと重さを、ずっしりと感じさせる小説である」と批評する。しかし、佐多稲子の「沈黙」が、「戦争責任」を文学的に表象しえたかどうかは、まったく別次元の問題である。少なくとも、「戦争責任・戦後責任」を果たすには、「沈黙」はふさわしくないということだけは指摘しておかなければならないだろう。ということは、小林は、作家の「沈黙」の意味を取り違えているのである。加害の体験者である佐多稲子の「沈黙」とアジアの人や元「慰安婦」の「沈黙」を相対するまでもなく、佐多稲子の「沈黙」が「人間への背信」の行為であることは、強調しておかなければならないだろう。

戦争責任はどう果たされたのか

吉本隆明は『文学者の戦争責任』を、戦後一一年経った一九五六年に書いた。その「まえがき」によると、その前年末には詩人や文学者の戦争責任の問題が論議されていた。知識人と「庶民」の関係性も問われているという。しかし、「問題は重要でありながら、展開すべき糸口はなかなか複雑であり、難しくもあり、ゆき悩んでいる。そのうえこの問題を横流しにして葬ろうとする動きさえでてきている。たれもが、傷口をかかえたまま吐き出せないでいる個処に触れなければ、問題は一步も進めてゆくことができないようにおもわれる」と、詩人、文学者の態度にじれったさを感じている。「何が問題なのかはつきりしている。戦後日本の民主革命が決定的に挫折した現在、こういう言辞（俗流コミュニケーション）がロウする典型的、盲目的言辞であり、戦後民主革命を敗退に導いた重要な原因の一つ――著者註）によってかれら前衛的部分が、自己の戦後責任を横流しにしようとしていることが問題なのだ。いいかえれば、かれらの言辞のなかには、戦争によって膨大なギセイを支払いながら、わたしたちが購いえたものが、戦後十年で空無に帰したことにたいする痛切な実感がどこにもないのだ」と指摘し、「たれもが、傷口をかかえたまま吐き出せないでいる個処に触れなければ、問題は一步も進めてゆくことができない」状況を問う。

時代は『時に佇つ』と前後するが、作家としての告白とも読める佐多稲子の文章がある。一九六五年に書かれた「戦時下のこと」というエッセイである。そのなかに戦時の自らの態度について次のように書いている。

文学は敗北したといわねばならないだろう。しかしこの敗北はまた、単に軍支配の圧力に屈したとだけ見ることもできないという気がする。(中略) 私などが、戦争の末期に、戦争協力に出てしまった根本は、ジャアナリズムに依存した生活の弱さが最初に挙げられる。(中略) 女の涙で当時の空気を受けとめていたから、その外に出て、自分の立場を貫こうとする確かさを失ってしまった。いってみれば、それは思想の弱さであったろう。あの当時は、戦争の性格を知っていなかったというわけではない。日本軍閥の侵略戦争であるということを知っていたが、国民のひとりひとりがものをいうこともできずに戦場にかり出されてゆくという事情そのものに、私は巻き込まれた。(中略) 作家などという特殊な職業のもの、ことに私自身の、つい先頃まで治安維持法で警察につながっていたような立場に対して周囲の目は、複雑にそがれていた。私はこれに負けたとおもう。周囲の複雑な視線に負けたと同時に、周囲の悲しい事実に対して主観的に負けたとおもう。³⁰⁾

長い引用になったが、これは、吉本隆明らの『文学者の戦争責任』の後に書かれている。戦後二〇年が経過している。しかし、このエッセイにも佐多稲子の戦争に協力したことの罪への深い意識を読みとることはできない。それは、「はじめに」にも指摘したように、佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」は、自らがそれに向かう「認識」としてではなく、どこまでも外からの追究や記憶として浮上してきたからである。中野重治らが発起人となった「新日本文学会」設立に関係する自身の作家としての問題であったからである。より端的にいえば、生活への危機意識であり、ここに引用したエッセイは、戦後の佐多稲子に継続する作家の「恥」に対しての弁明的な意思の表明であるといえるだろう。

佐多稲子が発起人に推挙されなかった「新日本文学」創刊号には、中野重治署名の「新日本文学創立準備会の活動経過報告」が読める。吉本隆明は、その箇所を指して次のように批評している。

「発起人としては、帝国主義戦争に協力せず、これに抵抗した文学者のみはその資格を有するという結論となった。秋田雨雀、江口渕、蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、徳永直、中野重治、藤森成吉、宮本百合子が決定した。」

このうち、すくなくとも三分の一の文学者は、文学的表現によって「帝国主義戦争に協力」したことはあきらかである。では、なぜらかな許容が、虚しい決定をうらざけたのか。

わたしは、内部事情もしらず、しることに関心をもたないが、この決定が、平和革命的な背景をタテにして、なされたであろうことに問題をみるのだ。⁽⁵⁾

佐多稲子が発起人のメンバーに加えられなかった一九四五年一二月のことである。また、その敗戦直前の五月に窪川鶴次郎とおよそ十八年の結婚生活を精算したことも看過できない。夫であった窪川鶴次郎は、一九三二年の春から一九三三年の冬まで獄中にあった。その後、佐多稲子は、夫の窪川鶴次郎に見送られて戦地慰問に旅立っていったのである。

とすれば、「新日本文学」の創立発起人のなかに佐多稲子が入れなかった事実が、作家として大きな衝撃であったことは想像に難くない。窪川鶴次郎が入って自分が入れない。その理由を理解しかねたのかも知れない。

佐多稲子が作家として再起を図るのは、一九四八年に書いた『虚偽』である。そこには、「新日本文学会」の設立時の苦い思いが描かれている。戦後、一七年間の牢獄生活から帰ってきた人も含めた八く九人の男女が談笑する場面で、主人公年枝（佐多稲子自身である）の屈折した心

境が描かれている。一座を見回す人の視線に年枝をはずしていることを感じ、彼女自身も無理に割り込んでいけば、違和感があると感じて黙ったままである。「年枝はその時までの生涯に、我が手に招いた恥辱に身をさらした経験を持たなかった。年枝にとって言えば、この座敷に集っている人の外に心底打ち明けるほどの友達を持たなかった」と思ってきたのに、「一緒だとおもっていたところから自分だけ遠く離されていた、とおもうと、羞恥といっしょに、ぼつんと肩先のうちそうそする孤独感を感じた。が、だって、と、年枝は昨日までの友情をたぐるようにし、だって、と心のうちで弾き返した。(中略)彼女の主観で、悪いことをしたとおもえないところに、だって、という反問が生じた。彼女のよそおった虚偽について、友達は、知っていたのではないのか⁴³⁾。ここに書かれている「主観で、悪いことをしたとおもえない」ということの事実は、自分がその時、「虚偽」をつらぬいたのだという思いであったのだろう。「虚偽」の振る舞いで戦争協力をした。「虚偽」を自分のなかに住まわせていたのだ。それが、「だって」ということを連発させ、「新日本文学会」のメンバーに入れなかったことを受け入れることができないという思いに至っていたのであろう。社会主義運動から転向を余儀なくされる時代にあつて、戦地慰問活動は、自己疎外的な行動であるという含意のもとで行ったという自負であろうか。しかし、仲間にはその思いが伝わっていない、理解されていないという苛立ちが「だって」という反問になっている。シンガポールで「プロレタリア作家のなれの果てさ⁴⁴⁾と呼ばれた時も「虚偽」であったから平然としていられたのだ。

『虚偽』は、「戦争協力者」という「恥」を貼られた佐多稲子の文壇への挑戦であったかもしれない。「二重に重なる羞恥に、実体をさらして責めを受けるしかない」と、年枝はおもった。が、年枝の勝気な性格は、ああ、と、齒がみをするように、性格そのものがぎしぎし鳴った⁴⁵⁾という「ぎしぎし」という音は、なにかを無理矢理引き裂く音であろうか。それとも逆に固い地盤を閉じる音であるのだろうか。

戦後の佐多稲子をして「佐多稲子ほど誠実に自己の戦争責任に対峙した人はいないだろう」(中山和子「作家案内」前出)という評価がある。しかし、ほんとうにそうだったのだろうか。佐多稲子を厳しく批評している高崎隆治は次のようにいう。

彼女(註——佐多)は昭和初年の左翼運動に自己のきずなを求めて、戦時下の自己を封印した上で再出発の足がかりをつくらなければならなかった。そうすることによってしか自己を立てなおすことのできなかつた佐多に、戦時下の彼女の文学的荒廢のすさまじさがうかがえるわけだが、それは佐多にとってきわめて安直な道であつたと私は思うのである。⁴⁶⁾

「女工」「女給」「女中」という、当時として最低の職業を転々とし、その生活の中からプロレタリア作家としての源泉を汲みあげて成長した彼女に、どのような職業でも就き得る自信や能力がなかったとは考えられないからである。(中略)作家は特権者である。戦争宣伝に活用され得るという意味でもそれは十二分に特権的な職業なのだ。書かなければ食えないのはあたりまえだが、しがない事務員にまさること数倍または十数倍の糧が得られる中産階級であることはたしかなのだ。⁽⁵⁸⁾

高橋隆治は、このように佐多稲子の戦争体験を執拗に酷評する。確かに、作家としての生き方を一端放擲して生きる道がなかったわけではあるまい。しかし、佐多稲子はそれを選択しなかった。

昭和十五年、このころより夫婦生活は内容的にくずれ、また思想的にも後退して戦争の情勢に妥協した作品を書くようになった、と、年譜に書いているが、そのころの町の空気を思い出す。(中略)出征して間もなかったのに、染め物職人は戦死し、大工の長男は戦病死した。こういう事実というものは、その隣組に生活する私などに、また別の面からの大きな圧力になるものであった。自分の後退を合理化しようとすることではないが、私はこの事実を泣いて受け、負けたのである。⁽⁵⁹⁾

時代の主観性に飲み込まれていく姿である。佐多稲子の「戦争責任・戦後責任」は、ここに書かれた「私はこの事実を泣いて受け、負けたのである」という事実から始まるべきであった。しかし、そうならなかった。概観してきたように佐多稲子のその足跡は、「戦争責任・戦後責任」に對峙するというよりも、作家としての生命を断じかねない戦後の文壇や共産党との戦いであつたのではないだろうか。その傍証として、夫であつた窪川鶴次郎の存在も見過ごせないだろう。一九四七年八月、窪川鶴次郎は自らの戦中の評論を撰んで『人間中心の文学思想』を発表した。その文章が『文学者の戦争責任』に引用されている。「……このような私のささやかな仕事は、なんらの破たんなしに立派に行われたわけではなかった。まもるべきもの、やるべきこと、それだけに満足していることができなかった。孤独は一面において私をきびしくもった。しかし私はその孤独に甘えた。私の日常生活における主観的な、個人的な欲望や心理を増長せしめた。私はかかる自己の弱さを克服してゆく努力をしなかった。まもるべきものをまもってゆく『抵抗』の困難さの代しようとして、つくらないとして、かかる自己の弱さを容認しようとした。そこに二十年間の結婚生活の破たんによつてはじめて私は自分というものを直視せざるを得なかつた」⁽⁶⁰⁾。これを引用した武井昭夫は、「戦時下の日常

生活や結婚生活の破綻について語りながら、その実生活ときりはなせず結びついているはずの自己の文学は、あくまで「抵抗」の文学として、自己検討をこぼんでいるからである。文学者にとって、実践的自己批判とはなにか。それはあくまでも自己の文学に対する仮借なき自己対決をのぞいてはありえないはずである。だが窪川はこれを私生活の自己批判の名において回避したのである^④と批評する。窪川鶴次郎が「回避」したもののなかには、妻の稲子が戦地慰問に出立したことも含まれているはずだ。そして、戦地慰問団の一員となった妻の傍らで「孤独は一面において私をきびしくもった。しかし私はその孤独に甘えた」というのは、妻への許し難い背信行為を認めないひとりの「男」にしかみえない。こうした現実のなかでの結果、佐多稲子を選択したのは、「虚偽」を内面化して生きることであったといえよう。そして、戦後、そのことによって「恥」を抱えることになったのだ。だがこれだけの批評ではすまない問題が作家・佐多稲子には、ある。それは、「沈黙の持つ濃密な層の厚さと重さを、ずっしりと感じさせる小説」と評価された佐多稲子の文学から、戦争そのものの犯罪性やまたアジアの各地を侵略して戦った日本及び日本人を自己として内省する文学が創造されなかったということである。

おわりに

二〇〇四年、自衛隊はイラクに「派遣」という名で出征した。そして、日本の動きは『日本国憲法』第九条を「改正」し、戦争をする「普通の国」に向かいつつある。また、『教育基本法』の「改正」も目論まれ、「愛国心」を再び日本人のアイデンティティに注入させようという動きが強まっている。それに呼応するように、男女平等を否定し、性教育を否定するバックラッシュも強力に動いている。

こうした情況のなかにあつて佐多稲子に学ぶべきことは、プロレタリア作家が時代の主観性に飲み込まれ、やすやすと戦地慰問にまで行ったという事実の重みではないだろうか。その理解の一つとして、佐多稲子を押しつぶした「大きな圧力」に屈していく、そのことが時代の主観性を自己化することであるという、なし崩しの体制の怖さを指摘できるのではないか。戦争の体験者は今も生きている。私の母も一〇代から二〇代にかけて戦争を体験した。戦争はおかしいと心のなかで叫ぶこともできない世情（体制）が支配していたと語る。そうした「体制」が、なし崩し的に民衆のなかに侵入してくるのだ。佐多稲子が自己の戦争体験を「虚偽」と偽ったのも、このなし崩しの体制の怖さを自覚する一方で、それに抗う力の弱さの故であつただろう。では、そういうなかで私にできることは何か。

「慰安婦」問題を民衆で裁いた「女性戦犯国際法廷」のなかに、自らの性犯罪、性暴力を告白した元兵士がいる。少数の元兵士が自らの「戦争責任・戦後責任」を果たそうとしている。そのような人々にはアジア各地で殺された人たちの嗚咽の声が聞こえる。また、アウシュヴィッツのガス室跡の瓦礫が目につかぶ。その地底から殺された人の声を聞かねばならない。私たちの可能性とは、そうした声や歴史の事実によって、被害者であり虐げられた人とともに歩むということではないだろうか。それは、時代の主観性と相対し、もっとも弱い立場に追いつめられ存在するしかない人々と非戦の共存的倫理を打ち立てることであろう。他者とともにある自由である。それが、アウシュヴィッツから学んだ力学であったのではないか。またそれが、アウシュヴィッツに立った者の「外在化しなければならぬ立場」であろうと思う。

註

- (1) 『関西大学人権問題研究室紀要』第46号、八七頁、関西大学人権問題研究室、二〇〇三年
- (2) 吉本隆明・武井昭夫『文学者の戦争責任』一六〇一七頁、淡路書房、一九五六年
- (3) (2) に同じ、八頁
- (4) 中山和子「作家案内」『私の東京地図』下、一五六頁、講談社学芸文庫、一九九二年
- (5) 佐多稲子『時に佇つ』五〇頁、講談社学芸文庫、一九九二年
- (6) (5) に同じ、六三〇六四頁
- (7) テオドル・W・アドルノ『否定弁証法』四四〇頁、作品社、一九九六年
- (8) 多木浩二「アウシュヴィッツ紀行」『ヘルメス』二七〇〇二七一頁、一九九四年
- (9) プリモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない』一二頁、朝日選書、一九八〇年
- (10) エリ・ヴィーゼル『夜』四六頁、みすず書房、一九六七年
- (11) (10) に同じ、一一頁
- (12) (10) に同じ、一五頁
- (13) (8) の二八九頁参照
- (14) E・トラヴェルソ『アウシュヴィッツと知識人』二三七頁、岩波書店、二〇〇二年
- (15) ツヴェタン・トドロフ『極限に面して——強制収容所考』四頁、法政大学出版局、一九九二年
- (16) (8) に同じ、二七八頁
- (17) カール・ヤスパース『罪責論』『ヤスパース選集』卷一〇、三九頁、理想社、一九六五年

- (18) 『ヤスパース』(世界の大思想Ⅱ-12) 重田英世編「ヤスパース年表」五一―八頁、河出書房、一九六八年
- (19) (17) に同じ、四〇頁
- (20) (17) に同じ、四三頁
- (21) (17) に同じ、四三頁
- (22) (17) に同じ、四四頁
- (23) (17) に同じ、一〇―一頁
- (24) (17) に同じ、一七―五頁
- (25) ヤスパースとハイデガーの関係は、『戦争の罪を問う』(平凡社、一九九八年)と改題された『責罪論』の「改題——責罪論の内に苦悩している理性ヤスパースとハイデガーの悲劇」を参照。ハイデガーはヤスパースから贈られた『責罪論』について沈黙に徹した。
- (26) (5) に同じ、四八頁
- (27) (5) に同じ、四九―五〇頁
- (28) (5) に同じ、四九頁
- (29) (5) に同じ、五〇頁
- (30) (5) に同じ、五〇頁
- (31) (5) に同じ、五三頁
- (32) (5) に同じ、五五頁
- (33) (5) に同じ、五七頁
- (34) (5) に同じ、五八頁
- (35) (5) に同じ、六二―六三頁
- (36) (5) に同じ、六三頁
- (37) (5) に同じ、六三―六四頁
- (38) 高崎隆治「佐多稲子と戦争」『戦争文学通信』一九九頁、風媒社、一九七五年
- (39) 高崎隆治「華中前線の女流作家」『戦場の女流作家たち』論創社、一九九五年
- (40) (39) に同じ、一〇二―一〇三頁
- (41) (39) に同じ、一一五頁
- (42) (39) に同じ、一一七頁
- (43) 佐多稲子「最前線の人々」『日の出』七月号、三七頁、一九四二年
- (44) (5) に同じ、五四頁

- (45) 同じ、六三〇六四頁
- (46) 同じ、六四〇六五頁
- (47) (5) 同じ、小林裕子「沈黙の論理と恥の倫理」一八三頁
- (48) (2) 同じ、七頁
- (49) (2) 同じ、一三頁
- (50) 佐多稲子「戦時下のこと」『国民の歴史』一〇六〇七頁、日本近代史研究会、一九六五年
- (51) (2) 同じ、五二頁
- (52) 佐多稲子『虚偽』『佐多稲子集』現代日本文学、二二四頁、一九七四年
- (53) (52) 同じ、二二四頁
- (54) (52) 同じ、二二四頁
- (55) (52) 同じ、二二五頁
- (56) (52) 同じ、二二五頁
- (57) (38) 同じ、一九頁
- (58) (38) 同じ、一四頁
- (59) 佐多稲子「私の昭和史」『佐多稲子全集』十八卷、二五七頁、講談社、一九七九年
- (60) (2) 同じ、一四八頁
- (61) (2) 同じ、一四九頁